カミと蒟蒻（二〇一九年改訂版）

長谷川源太

【登場人物】

慎次郎　小川 慎次郎　九六歳（昭和十九年当時　二一歳）

幸子　小川 幸子　九一歳（同一六歳、旧姓佐々木）

大津　大津 俊介　（同一九歳）

戸納　戸納 さゆり　四八歳

幸子の父

兵士

一場　来客

令和元年十月。京都、小川の家。築六〇年くらいの木造。
舞台は、その家の居間で、畳間の八畳。下手に玄関、上手には台所と洗面所などがある。
部屋の中央にはテーブル型のコタツ。
部屋の隅に車いすに座った老女、小川幸子がいる。
幸子は頭に毛糸の帽子をかぶっており、膝の上には旅行のパンフレットが載っている。
テーブルの上の小さなラジカセから、唱歌「故郷の空」が流れている。
幸子は曲に合わせて歌っている。

幸子　夕空晴れて秋風吹き
　月影落ちて鈴虫鳴く

奥から男が出てくる。この家の主である小川慎次郎。
慎次郎は下手、玄関の方を見ている。
右手を左手で庇う様子。無言。
玄関を見ている。
次に柱時計を見る。

慎次郎　…。
幸子　なに。
慎次郎　いや。あの。ほれ。
幸子　あ。
慎次郎　なんや。

幸子　夕刊。
慎次郎　夕刊？
幸子　ほれ。
慎次郎　…

慎次郎、玄関先に出ていく。
幸子、また、故郷の空を歌いだす。
慎次郎、夕刊や手紙を手に、戻ってくる
幸子にそれらを渡して、

慎次郎　ん。
幸子　ん。
慎次郎　…。
幸子　ん？
慎次郎　…そろそろやろ。
幸子　え。
慎次郎　だから。もう…。

犬の吠える声。
続いて、チャイムの音。

慎次郎　あ。はい。はいはい。

慎次郎、玄関に出ていく。

幸子　…。

郵便物などを見ながら、また、幸子歌いだす。

慎次郎の声　…あ。お電話の。ああ…。（幸子に）おーい。

犬の吠える声。

慎次郎、戻ってくると、幸子、まだ歌ってる。

慎次郎、ラジカセを切る。

幸子　…あ。
慎次郎　お客さんやで。
幸子　ほれ（とハガキを差し出す）。
慎次郎　なんや。
幸子　法事やて。
慎次郎　はあ？
幸子　谷中（やなか）の。ほれ。千代さんの。
慎次郎　…。
幸子　電話せんでええの。本家。
慎次郎　ええから（と、ハガキをテーブルの上に投げ出す）。
戸納　（玄関先から戸納、顔を出して）あの。
慎次郎　ああ。入って入って。
幸子　誰？
慎次郎　誰ってお前、あの。ほれ。取材受けるンやろ。
幸子　ああ。はいはい。

戸納　あの。こんにちは。先日、お電話しました洛陽新聞の、
慎次郎　どうぞどうぞ。

犬、吠え続けている。

慎次郎　さくら、ハウス。
戸納　すみません。アタシが来たから。
慎次郎　ほれ。さくら。さくら。お客さんや。さくら。ほれ。
幸子　ちょ。なあ。さくら散歩にでも連れてって。
慎次郎　さっき行ってきたところや。
幸子　もう一回。
慎次郎　え。
幸子　ほれ。
慎次郎　…ほな。ごゆっくり。
戸納　すみません。

慎次郎、仕方なしに出てゆく。
犬のはしゃぐ声。

戸納　…元気ですね。わんちゃん。
幸子　ごめんねえ。
戸納　あ。いえ。
幸子　まあ。こちらへどうぞ（と中央のこたつを勧める）。
戸納　（幸子の膝の上のパンフレットに気が付いて）あ、ご旅行ですか？
幸子　え？

戸納　すみません。それ。
幸子　ああ。うん。しばらく海見てへんし。ええなぁって。
戸納　いいですね。どちらへ。
幸子　（パンフレットをテーブルの上に置いて、首を横に振りながら）行けたらええなって。
戸納　そうなンですね。
幸子　まあまあ。どうぞ。お入り。
戸納　すみません。（コタツに足を入れて）…あ、あったかあ。
幸子　ねえ。今日はヤケに冷えるし。
戸納　ホントに…。

短い間。

幸子　…ン？
戸納　あ。ああ。あの。小川幸子さんでいらっしゃいますよね。華頂女学校の卒業生の。
幸子　え。
戸納　あの、お名前。小川幸子さん。
幸子　名前。ああ。なんておっしゃるンですか。
戸納　え。あ。失礼しました。私は、あの、洛陽新聞の戸納と申します（名刺を出す）。
幸子　トノさん。
戸納　いや。トノ「ウ」です。
幸子　トノ「ウ」さん。
戸納　はい。よろしくお願いします。
幸子　ああ。はいはい。こちらこそ。
戸納　で。お電話でもお話ししましたが。
幸子　はいはい。電話。

戸納　ええ。この度、私どもの新聞で、京都の戦争を特集することになりまして。
幸子　はいはい。京都の。
戸納　あの。先の太平洋戦争なンですけどね。
幸子　はいはい。戦争。
戸納　京都は空襲とかほとんどなかったので、戦争の傷がないように思えるンですけど、建物疎開とか学徒動員とか、それなりにいろいろあったンですね。
幸子　はいはい。いろいろね。
戸納　ええ。そうなンです。中でも、戦争末期に、大規模な学徒動員が行われたらしくて、小川さんのいた華頂女学校からも、たくさんの女学生が動員されていたらしいンですね。
幸子　へえ。
戸納　あの…小川さんが、華頂女学校に入学されたのは昭和一九年でしたよね。
幸子　あ。入学。入学ね。昭和一九年やったね。戦争でね。勉強どころやのうて。何しに学校に行ったンだかね。今じゃ考えられへンしね。
戸納　いろいろ御苦労されたンでしょうね。
幸子　苦労はねぇ。みんなねぇ。国中戦争やしねぇ。男の人は兵隊にとられていくし、女は銃後の守りやら学徒動員やらいうて、工場やらに駆り出されたりしてね。
戸納　ですよね。実は今回は、その、学徒動員のお話を伺いたくって。
幸子　ああ。学徒動員。
戸納　ええ。そうなンです。（ノートや資料を取り出して、噛んで言い含めるように）当時の女学生は、皆学徒動員に出てるンです。若い男性は皆徴兵されてたンで、国中働き手が足りなくって、若い女学生までも駆り出されたンですね。いくつかの班に分かれて、工場やら農家やらの仕事を手伝いに行って。で、華頂女学校では一部の生徒が歌舞練場に行ってるンですね。祇園甲部歌舞練場。あの、芸妓さんや舞妓さんが踊る。ありますよね。
幸子　ええ。ええ。祇園の。行きました。行きました。

戸納　あ。ホントに？　あの…小川さん、行ったンですか？　歌舞練場？　学徒動員で？　…いやぁ、良かった。なかなか当時のことを知る方に会えなくって。
幸子　あら。
戸納　はい？
幸子　やだ。アタシ、お茶も出さんと。
戸納　あ。どうぞどうぞ。お構いなく。
幸子　あ。そうそう。美味しいゼリーが冷えてて。ちょっと待ってね。
戸納　いえいえ。ホントお気遣いなく。
幸子　ホンマに美味しいンやから。
戸納　ありがとうございます。で。あの、覚えてます？　当時のこと。
幸子　へ。
戸納　だから、祇園甲部歌舞練場でのことです。
幸子　歌舞練場？
戸納　あそこで秘密兵器を作ってましたよね。戦局の逆転を狙った最終兵器。
幸子　最終兵器。
戸納　ええ。それを女学生の皆さんが作ってませんでしたか？
幸子　（遠くを見るように）…。
戸納　小川さん？
幸子　…肌を切るような寒さの厳しい冬やった。
戸納　え。
幸子　この間まできれいな芸妓さんやらが踊ってたのね。その、歌舞練場。
戸納　はい。
幸子　その客席がみんな取っ払われて、がらんどうになって。
戸納　がらんどうに？
幸子　そこにアタシら女学生が集められてね。作ったの。

戸納　作ったって、何を。
幸子　「ふ」号兵器。
戸納　「ふ」号兵器。

軍帽を被った慎次郎、出てくる。

二場　「ふ」号兵器

慎次郎　貴様の行動は国家に対する反逆行為であるぞ！

照明転換。
戸納、退場。
幸子、毛糸の帽子を脱ぐと、下から三つ編みのお下げが落ちる。額には日の丸に神風の文字。
昭和一九年一一月。場所は祇園甲部歌舞練場。
慎次郎はやはり左手で右手を庇っている。

慎次郎　（扉を開けようとするが鍵がかかっている）佐々木、ここを開けろ。佐々木。
幸子　開けません。
慎次郎　何を。班長命令に従わぬと言うのか。
幸子　従えません。
慎次郎　貴様。班長命令は上官命令。上官命令は、（気を付けをして）畏れ多くも天皇陛下の命令であるぞ。

幸子　私たちは御国のために役立ちたくて、学業を諦め、学徒動員に来ているンです。他の学友は皆、現場にいるのに、何で私だけが経理事務なンですか。
慎次郎　病弱である貴様の体を労わって、担当教員がわざわざ配慮したのではないか。
幸子　要らぬ心配です。アタシはこの手で「ふ」号兵器を作り、アメリカに一矢報いたいンです。
慎次郎　貴様の担当する経理事務も「ふ」号兵器には欠かせない作戦の一部である。貴様の仕事も、御国のために役立っているのが何故分からんのだ。
幸子　私が経理をして、米兵は何人死にますか。イギリス兵は何人死にますか。一人も死なないではないですか。
慎次郎　貴様…。こんなことをして、親兄弟が嘆くぞ。いいのか。
幸子　兄は先のミッドウェーで戦死しました。こうして不毛な議論を重ねている間にも、我が軍の兵は必死の戦いをしているのです。私はこの手で兄の敵を討ちたい。私にも現場の作業をさせてください。お許しをいただければここを開けます。

戸外で車のクラクションの音。

慎次郎　…区隊長にお伺いを立てる。

慎次郎、退場。
幸子、ため息。
短い間。
そこに軍帽に学生服姿の男性、大津が駆け込んでくる。大津の学生服は継ぎはぎが目立ち、足元をゲートルで巻いている。

大津　お邪魔するよ。
幸子　あ。

大津　これ（と、幸子に材料のごわを差し出す）。
幸子　…。
大津　小川班長から預かってきた。
幸子　…ありがとうございます。これで私も作業に参加することが出来ます。
大津　うん…（背後の様子をうかがっている）。
幸子　またですか。
大津　え？
幸子　今度は何をしたンですか。
大津　別に。
幸子　何もしなくても追われたりするンですか。
大津　何もしなくても追われたりするンだよ。今の世の中は。
幸子　私は警察の御厄介になることなんてありませんけど。
大津　こっちだって御厄介になんかなりたかないよ。
幸子　…。

幸子、ごわを手で丁寧に伸ばす。

大津　またやってンのか。
幸子　は？
大津　ストライキ。
幸子　それ敵性語ですけど。
大津　けど、ストライキだろ。
幸子　小川班長に報告しますよ。
大津　おいおい。密告なんて、うら若き乙女のすることじゃないぜ。
幸子　あなたが軽々しい言葉遣いをするから、

大津　まあまあ。
幸子　…。

大津、ポケットから煙草を取り出して、一本咥える。
学生服のポケットを叩いて、

大津　あ。火ない？
幸子　やめてください。ここ禁煙です。可燃物ばかりですよ。
大津　おお。そうか。そうだよな。
幸子　何考えてるンですか。
大津　（煙草をしまいながら）まあ、いろいろ。
幸子　どうせ警察に追われるような碌な事考えてないンでしょ。
大津　心外だな。そっちこそ何考えてるンだ。
幸子　何って？
大津　京都佐々木電機の御令嬢なンだろ。
幸子　…。
大津　そのお嬢様が、なんだってわざわざ学徒動員に志願したりしたンだい？
幸子　余計なお世話です。
大津　小川班長も大概手焼いてるンだぜ。かわいそうに。ほどほどにしてやれよ。
幸子　心苦しく思ってます。
大津　（笑って）心苦しくか。こいつはいいや。
幸子　いけませんか。
大津　いいンじゃない。人は基本的にどうあろうと個人の自由だ。政府や体制に身を委ねるもンじゃない。
幸子　大津さん、でしたよね。

大津　そう。立命の法科だ。君と同じ学徒動員で、今は運搬班にいる。
幸子　どうしていつもここに来るンです。
大津　さあ。どうしてかな。
幸子　どうして。
大津　迷惑かい？
幸子　これでも忙しいンですけど。
大津　きっと、好きだからだな。
幸子　好きって？
大津　だから君が。
幸子　はあ？
大津　迷惑かい？
幸子　迷惑です。
大津　きついなあ。さっちんは。
幸子　幸子です。
大津　だからさっちんだろ。
幸子　あの、いい加減、運搬班に戻ったらどうです。
大津　つれないなあ、さっちんは。
幸子　その呼び方やめてください。
大津　だって、さっちんはさっちんだろ。
幸子　ふざけないでください。日本は今、国家存亡の危機にあるンですよ。女子どもも一致団結して、この国難を乗り切らなければならないンです。あなたも、もっと緊張感を持つべきです。
大津　いや、御説御尤も。僕も君の国を想う気持ちに賛同する。ついては僕にも何か手伝わせてほしい。
幸子　（手元のごわを伸ばしながら）あなたには運搬班という部署があるじゃないですか。そちらでお勤めください。

大津　うん。まあ、そうなンだけど。あっちは結構人手が足りてるっていうかさ。今は「国家存亡の危機」なワケだし、まずはこっちで気球を作ることの方が先決だろ。だって気球がなければ運搬もできないワケだし、当然こっちの方にこそ重点的に労働力を配置すべきじゃないか。
幸子　はあ？ナニ言ってるンですか？
大津　（急に真面目になって）貴様、四の五の御託を並べている場合か！
幸子　え。
大津　このふ号兵器、俗に言う風船爆弾は、内地からアメリカ本土を直接攻撃すべく、明春三月までの五箇月間に、一万五千発を放球しなければならないのだぞ。

照明転換、音楽。

慎次郎　（軍帽を被って出てきて）戦況が悪化の一途をたどる昭和一九年一〇月二三日、
兵士　（出てきて）日本陸海軍はフィリピンレイテ沖敵機動部隊に対して連合艦隊総力を以て挑み、これに大敗。
大津　戦艦武蔵被弾、一〇二三名の乗組員とともに撃沈。
慎次郎　空母瑞鶴、瑞鳳、千代田、千歳、以上四隻いずれも撃沈。
兵士　重巡洋艦愛宕、麻耶、鳥海、筑摩、鈴谷（すずや）、最上、以上六隻いずれも撃沈。
大津　戦局が絶望的であることを象徴するように、この戦いから神風特別攻撃隊が作戦を開始した。
慎次郎　そして脅かされる本土。
兵士　既に東京上空ですら、日本に制空権はなかった。
大津　漆黒の闇を射すサーチライトに、不気味に浮かび上がるＢ29。
慎次郎　高高度を飛行する敵機に、高射砲は届くこともなく、
兵士　迎撃に上がる戦闘機すらなかった。
大津　そしてここに至って起死回生を図るべく、大本営は「ふ」号兵器によるアメリカ本土攻撃作戦を発令した。

幸子　「ふ」号兵器。俗に言う風船爆弾である。
日本上空では、晩秋から真冬の間、高度八〇〇〇から一二〇〇〇メートルにかけて、時速三〇〇キロメートルの偏西風が吹く。風は確実にアメリカに向かう。この偏西風で、爆弾を吊るした気球をアメリカに送る。これぞ神風。
大津　吊り下げるのは一五キロ爆弾一発と四キロ焼夷弾二発。
慎次郎　気球の直径約一〇メートル。
兵士　気球内を水素ガス六〇パーセントで満たし、放球。
大津　二昼夜半でアメリカ上空に到達し、自動的に爆弾を投下する。
慎次郎　風任せとはいえ、数多く飛ばせば比例してアメリカへの着弾数も上がる。
兵士　下手な鉄砲数撃ちゃ当たる。
大津　しかし偏西風は春には止んでしまう。
幸子　猶予はたった五箇月。
慎次郎　いいか。皇国の存亡は放球数、つまりどれだけ風船爆弾を飛ばせるかにかかっている。目標は次のとおりである。
十一月、約五〇〇個。
十二月、約三五〇〇個。
一月、約四五〇〇個。
二月、同じく四五〇〇個。
三月、約二〇〇〇個。
以上、計一五〇〇〇個をこの五箇月で放球すること。
兵士　無理です。球皮に用いる和紙も、その和紙を接着する蒟蒻も、国内に備蓄はありません。
大津　原料ばかりではなく、和紙を漉く職人が足りません。仮に一万発分の風船爆弾の和紙を百日で準備するとした場合、一三〇〇人の職人が必要です。既に徴兵により、紙漉きの職人はどこも人手不足です。

慎次郎　（大津と兵士を立て続けに殴る）貴様ら、それでも帝国臣民か。このままおめおめと敗戦の屈辱を舐めるようなことがあれば、貴様らの親族も米国に凌辱されるンだぞ。手が足りなきゃ犬でも猫でも紙漉きさせろ。蒟蒻芋が足りなきゃ、百姓の種芋まで供出させろ。それが貴様らの役目だというのが分からんか（と、再び二人を殴る）。

大津と兵士　自分が悪くありました。

慎次郎　これからが、我が大和民族の真価が問われる総力戦である。各々個人の事情にこだわることなく、御国のために注力してもらいたい。以上。

慎次郎、兵士退場。

大津　というワケだから、僕もここでさっちんの仕事を手伝うよ。

幸子　糊。

大津　へ？

幸子　蒟蒻糊を溶いてください。

大津　え？　え？　どれ？

幸子　そのバケツの。早く。

大津　ああ。これね。さすが名家のお嬢様。人使いが荒いな。（バケツに入った糊をかき混ぜながら）うわ、ナニこれ。重い。

幸子　風船爆弾の気球は、先ほどあなたが持って来てくれたこのごわと呼ばれる和紙で作ります。しかし和紙そのものでは耐久性がない。そこで和紙を何重にも重ね、圧着することで、軽くて薄い気球の球皮になるのです。その糊は和紙を圧着するために必要な蒟蒻糊です。

大津　何で蒟蒻が糊になるの？

幸子　立命館の学生であるのに、そんなことも知らないンですか？

大津　僕は法科だ。蒟蒻学部じゃない。

幸子　いいですか。蒟蒻の主成分であるマンナンは、そもそも水に溶けやすく、糊状になります。それにアルカリ成分を加えると強く固まりまるのです。
大津　（かき混ぜながら）それで、こんなに、重いのか。
幸子　（ため息）…さ、早く。
大津　（かき混ぜながら）ムリムリムリムリ。だって納豆より重いものかき混ぜたことないンだぜ。
幸子　はあ？
大津　知ンねの？　納豆。あの日本を代表する発酵食品、ビタミンＢ１やナットウキナーゼを豊富に含む、我が郷土水戸が誇る、
幸子　腐れ豆。
大津　…腐ってねぇっつうの。発酵だかんね。アレ。
幸子　水戸ですか。お生まれ。
大津　さっちんは京都け？
幸子　伏見です。
大津　バッチリだぁ。
幸子　何のことです。
大津　東男に京女。
幸子　私、糸を引くようなくどい男に興味ありません。
大津　そんな、さっちんつれねえこと言わねぇの。
幸子　その呼び方やめてもらえますか。
大津　水戸は本当に素晴らしいところなンだ。
上野駅を出た常磐線が利根川を渡る。すると景色は町並から一変し、どこまでも関東平野に広がる田んぼ、田んぼ、また田んぼ。
幸子　ド田舎じゃないですか。
大津　やがて正面左手には、ふたこぶ駱駝のような小山が見えてくる。これが、ガマの油で有名な筑波山だ。日本百名山の中では鹿児島の開聞岳と並んで低い標高八七七メートル。

幸子　低すぎ。
大津　続いて正面右手には、地平線まで軒を連ねた掘立小屋が見えてくる。これが全て豚舎だ。
幸子　うわ、臭っ。
大津　茨城県のローズポークは、ランドレース種、大ヨークシャー種、デュロック種という３種を掛け合わせて育成するため、締りの良い、赤肉に混在する、大理石のような脂肪が特徴なンだ。ポークカレーとかもう最高。
幸子　カレーはビーフでしょ。
大津　水戸を過ぎると、やがて右手には真っ青な太平洋が見えてくる。車窓から入る潮風。カモメの鳴き声。翻る大漁旗。初鰹に戻り鰹、冬は名物鮟鱇鍋だ。ほらほら、どう？　どう？　どう？　魅力的だろ。
幸子　泥臭いばかりで、ちっとも文化的な香りがしないンですけど。
大津　幸子、ほらご覧。あれが五浦（いづら）の海岸だよ。
幸子　切り立つ絶壁、そこに殴りつける荒波、そして肌を突き刺す西風。
大津　日本美術院を設立した岡倉天心は、横山大観、下村観山らとこの地で日本画を創作したンだ。ほら。あれが、岡倉天心が思索にふけった六角堂だ。
幸子　あの石碑はナニ？
大津　「亜細亜は一なり」と彫ってある。伝統的な東洋文化の重要性を説いた天心が、アジアの団結と再生を願った碑なンだ。
幸子　アジアの再生。
大津　「私は、海辺に座って、一日中、海が逆巻き、波立つのを眺めています。いつか霧の中からあなたが立ちあらわれてこないかと思いながら。いつか、あなたは、もっと東の方においでになりませんか――中国へ――マレー海峡へ――ビルマへ。ラングーンなどカルカッタから石を放り投げるほどの距離にすぎないではありませんか。空しい、空しい夢！　でも、なんと甘美な夢か。」
　幸子さん、一緒に茨城に来ませんか。今なら袋田の滝と偕楽園の散策に、この大津俊介がご案内いたします（と、手を握る）。

幸子　結構です（大津の手を振り払う）。
大津　えー。ここまでやらしといて、それはねかっぺよ。
幸子　はい、手を動かす。
大津　だから重いっつうの。
慎次郎　（出てきて）…何をしてる。
大津　あ。（気を付けをして）班長の御指示のごわをこちらに持ってまいりました。
慎次郎　用が済んだら持ち場に戻れ。
大津　は（出て行こうとする）。
慎次郎　待て。
大津　…（立ち止まる）。
慎次郎　これ、着様か（と、一枚のビラを差し出す。）
大津　…。
慎次郎　「帝国主義戦争絶対反対。我ヶ国ハ即刻、中国カラ撤兵スベシ。」
大津　…。
慎次郎　先ほど、このビラを所持した学生が、この歌舞練場に入った、と特高の刑事に聞かれたが。
　貴様か。
大津　…。
慎次郎　答えろ。
大津　僕は…今般の戦争は一部特権階級のみを利するものであり、多くの人民の犠牲の上に成り立つ
　侵略戦争以外の何物でもないと、
慎次郎　…（殴る）。

　大津、再び崩れ落ちる。

慎次郎　いいか。我々の製造しているものは、国家の命運を左右する最終兵器である。その作業現場にアカが紛れていたなどとあっては、前線で血の汗を流している兵たちに詫びても詫びきれん。
大津　…。
慎次郎　次はないぞ。
大津　…悪くありました。
慎次郎　持ち場に戻れ。

大津、引きずるように体を起こして、退場。
それを黙って見ていた幸子。
どこか遠くで犬の吠える声が聞こえる。

慎次郎　お嬢様はいい気なもンだな。班長に楯突いても御咎めなしだ。
幸子　…ありません。
慎次郎　は？

犬の吠える声、少しずつ大きくなる。

幸子　お嬢様じゃありません。
慎次郎　それがお嬢様なンだ。

慎次郎、踵を返して退場
幸子、去った慎次郎の背中を見る。
暗くなる。

3場　取材

犬の吠える声。
令和元年十一月。
幸子は再び毛糸の帽子をかぶっている。

幸子　澄行く水に秋萩たれ
玉なす露は、ススキに満つ
思へば似たり、故郷の野邊
ああわが弟妹（はらから）たれと遊ぶ
戸納　（出てきて）小川さん、これでよかったですか？
幸子　ああ。それそれ。
戸納　すみません。分からなくって。
幸子　いやいや。他人のウチの冷蔵庫ってなかなかね。これがおいしいのよ。
戸納　蒟蒻ゼリー。
幸子　中でもこの緑色のが美味しくって。
戸納　よかったです。見つかって。

幸子、ゼリーを食べ始める。
犬の鳴き声。

慎次郎の声　ただいまあ。

慎次郎が玄関から入ってくる。

戸納　お邪魔してます。
慎次郎　（笑って）ああ。ご苦労さんです。
戸納　もう少しお話を伺いたくて。
慎次郎　はあ。いやいや。御精がでますなあ。
戸納　すみません何度も。
慎次郎　結構ですよ。
幸子　お父さん。谷中から電話あったで。
慎次郎　…。

慎次郎、荷物をテーブルに置いて、幸子に背を向けている。
何か聞こえるのか、首を傾げ、周りを伺う様子。

慎次郎　…。
幸子　なあ。
慎次郎　（振り向いて）…あ？
幸子　だから電話や。谷中から。
慎次郎　また、食うてンのか。
幸子　は。
慎次郎　ゼリー。
幸子　これ食べンとウンコさん出えへんの。
慎次郎　食いすぎや。
幸子　お父さん、ゼリー、また違うとこ入れたやろ。探してもろうたンや。
慎次郎　え。
戸納　すみません。勝手にお台所入って。

慎次郎　ああ。いやいや。お手間かけて。
戸納　あの。
慎次郎　はい？
戸納　ご主人さんも一緒だったンですね。
慎次郎　一緒？
戸納　小川さん、いや奥さんと。その、歌舞練場。風船爆弾でしたっけ。
慎次郎　ああ。まあ。
戸納　あの。お話伺ってもいいですか。
慎次郎　は？
戸納　ご主人さんの。
慎次郎　いやあ。ワシなんかがお役に立てることはないでしょ。
戸納　そんなことありません。あの、お答えいただける範囲で結構ですから。
慎次郎　はあ。
戸納　あの。ご主人さんお名前は？
慎次郎　は？
戸納　すみません。改めて。
慎次郎　ああ…小川、慎次郎。
戸納　おがわ…「しんじろう」の「しん」は？
慎次郎　あの、まんなかぼーひっぱって、横ちょんちょんに、真実の真。
戸納　横ちょんちょん…ああ。
慎次郎　太郎次郎の次郎で。
戸納　…慎次郎、さん。お歳は。
慎次郎　いくつや。えっと。今年が昭和で言うと九四年やさかい…
戸納　昭和って。
慎次郎　あれ？　ナンボや。

戸納　昭和でしたか、お生まれ。
慎次郎　いや。大正や。大正一二年。
戸納　あ。えっと、きゅ…九十六ですか？
慎次郎　そんなになるか（笑って）。
戸納　大正一二年なら。
慎次郎　そうかあ。そんなにかあ（笑っている）。
戸納　ちなみに、ご主人さんのお生まれは京都ですか。
慎次郎　…。
戸納　あの。
慎次郎　何喋ってました？　幸子。
戸納　え。
慎次郎　その、ほら。取材で。
戸納　いや何って、経理事務が嫌でストライキをしたとか、風船爆弾を作るのに蒟蒻糊を溶いたとか。
慎次郎　（笑って）ストライキかあ。そんなこともあったかなあ。
戸納　やっぱり秘密だったンですか？　風船爆弾って。
慎次郎　ええ。機密事項でね。終戦後も「ふ」号作戦については、決して喋るな、墓場まで持って行けってね。戦争は終わってンのに、命令もなんもないンやけど。
戸納　そうだったンですね。和紙で気球なんて作れるンですね。あの平面な和紙が、こう旨い具合に球形になるもンですね。
慎次郎　地球儀あるやないですか。アレですわ。
戸納　地球儀、ですか。
慎次郎　地球儀っちゅうのは、アレよう見ると、いくつかの三角形をつなげてお椀を作ってね。
戸納　ああ。そのお椀を上と下で逆さにしてくっつけて。
慎次郎　そうそう。あれと同じ要領で。
戸納　蒟蒻糊っていうのは、それまでも接着剤とかで使われていたンですよね。靴とか塗料とか。

慎次郎　アンタ詳しいね。
戸納　その風船爆弾を小川さんたち、女学生が作ってた。
慎次郎　何分人手が足りひんかったさかい。

慎次郎、ふと黙り込む。
戸納に背を向けたまま、周囲を見回している。

戸納　あの。
慎次郎　…しっ。
戸納　…。

短い間。

戸納　どうかしましたか。
慎次郎　え。ああ。いや。
戸納　あ。それから歌舞練場には立命の学生さんもいたンですか？
慎次郎　え。
戸納　いえ。この前お話伺ったとき、奥さんが。
幸子　…（寝ている）。
慎次郎　どうやったか。
戸納　え。
慎次郎　いたかもしれません。そういう学生さんも。

破裂音。
続いてドアをノックする音。

4場　噂

戸納退場。
大津が入ってくる。
慎次郎は軍帽をかぶる。
幸子は車いすのうえで寝ている。
昭和二十年一月。

大津　失礼します。
慎次郎　また失敗か。今日は何発目だ。
大津　三発目、かと。しかし貼り合わせに問題はなかったはずですが。
慎次郎　では何で破裂した？
大津　女学生たちはよくやっております。
慎次郎　そんなことは聞いてない。
大津　少女たちは、ごわの接合に全体重をかけて、完全な密着を試みています。それも、指紋がなくなるほど、必死で圧着に努めております。
慎次郎　（大津を殴る）だからどうした。破裂しては意味がなかろうが。セイガクの分際でイッパシの口利くンじゃねぇ。
大津　…。
慎次郎　どうも最近、貴様ら弛んでおらんか。
大津　決して弛んでなど。
慎次郎　では、何故こうも失敗が続く。

大津　…噂話しが流れております。
慎次郎　ほう。どんな噂だ。
大津　…。
慎次郎　言ってみろ。
大津　この「ふ」号兵器の作業現場を、視察に来るという。
慎次郎　視察。
大津　は。
慎次郎　誰がだ。
大津　天皇自身がです。

慎次郎、大津を殴る。

慎次郎　口を慎め。
大津　…。
慎次郎　どういうことだ。
大津　…畏れ多くも、
慎次郎　…（気を付けをする）。
大津　陛下に於かれましては、近く京都御所に入られるご予定がおありになり、その際、この歌舞練場の作業をご視察になられて、決戦兵器である「ふ」号兵器を製造する我々学生たちを、御自ら激励されるとか。
慎次郎　誰がそのようなことを。
大津　専らの噂であります。
慎次郎　…。
大津　学生たちは、既に舞い上がっております。必ずや陛下のご期待に沿うのだと、血で必勝と書いた鉢巻きを締める者すら現れております。

慎次郎　血で必勝、か。
大津　視察の件、本当でありますか。
慎次郎　噂か。
大津　仮にそうでないなら…。
慎次郎　ないなら？
大津　学生たちの落胆は如何ばかりか。士気が大いに下がることは避けられないと思います。
慎次郎　…。
大津　小川班長は何かご存じではないのですか。
慎次郎　陛下御自らのご視察。
大津　班長。
慎次郎　貴様はどう思う。
大津　よろしいのですか。
慎次郎　言ってみろ。
大津　ありえないと思います。
慎次郎　ほう。何故だ。
大津　天皇は、
慎次郎　（大津がどのように言うのか、敢えて様子を見て）…。
大津　天皇は、大日本帝国憲法において陸軍及び海軍を指揮監督する最高の権限、いわゆる「統帥権」を持っています。その最高の指揮官である天皇自身が、いくら京都御所の近所にあるとはいえ、一介の兵器の製造工場を視察、激励されるということは甚だ現実味に欠けます。
慎次郎　しかし、この「ふ」号兵器は、戦局を左右する最終兵器である。
大津　お言葉ですが、「ふ」号兵器がアメリカに対して戦果を挙げたという報告は、昨年暮れの上海同盟電のみであり、その根拠もいささか疑念があります。現にその後、「ふ」号兵器によるアメリカの被害報告は一切ありません。そのような戦果で、天皇自らが視察とはありえないと考えます。

逆に言えば、そういう妄言に振り回されるほど、学生たちは精神的に疲弊していると言わざるを得ず、

慎次郎、大津を殴る。

慎次郎　アカが。
大津　…小川班長の御実家はどちらですか。
慎次郎　…貴様に何の関係がある。
大津　僕の実家は、水戸でして。
慎次郎　道理で納豆臭えはずだ。
大津　…水戸といっても町中から大分外れた御前山という田舎です。
慎次郎　それがどうした。
大津　僕は五人兄弟の四番目で、上に兄が三人、下に妹が一人おります。両親は百姓で、山の斜面に張り付いたような猫の額ほどの田んぼを、日の出から日が暮れるまでずっと耕しております。わずかな収穫も大半が小作料として地主に取られ、日々の暮らしにも困窮する始末。兄たちは早々に進学をあきらめ、小学校を出ると、長男は田んぼに、次男は炭鉱に、三男は新天地を求めて大陸に渡りました。既に進学を諦めていた僕に、兄たちは「お前は俺たちの中で一番勉強ができたンだ、だから大学に行け。大学に行って、立派に出世して、この世の中を変えてくれ。」と、借金をかき集めて、学費を工面してくれました。妹も、小学校を出たら、水戸の大店（おおだな）に下働きに出ると言って、喜んで僕を京都に送り出してくれました。
慎次郎　泣かせる話じゃねえか。
大津　僕はどうしたら両親が、兄たちや妹が、食うのに困らない世の中になるのか、幸せになれるのか、必死に勉強しました。そんな時、一冊の本に出会いました。幸徳秋水という人が書いた本です。ご存知ですか。
慎次郎　知らん。

大津　秋水は高知県中村の出身で、あの日露戦争で日本中が沸き立っているときにも、毅然と戦争反対を訴えた人です。秋水は言います。
「戦争はいつも政治家、資本家のためにたたかわれているに過ぎない。領土や市場は、いつも政治家、資本家のためにひらかれているに過ぎない。多数国民、多数労働者、多数貧民のあずかり知るところではないのである。」と。
日露戦争からこっち、果たして日本は豊かになったでしょうか。世界恐慌のあおりを食らって、東北では娘たちが売られ、銀行は取り付け騒ぎに巻き込まれました。現に、私たちの暮らしはよくならないではないですか。兄弟五人いて、進学させてもらえるのは僕だけじゃないですか。
慎次郎　…。
大津　天皇は政治家や資本家の上に立つ人間です。その天皇が、どうして我々学生の作業現場などに激励に来るでしょうか。ありえない話です。
慎次郎　…。
大津　小川班長。もし噂が根拠のないデマなら、たとえ一時、学生たちの士気が下がっても、真実を伝えるべきです。冷静さを取り戻して作業に当たらなければ、貼り合わせの失敗どころか大きな事故も誘発しかねないと考えます。
慎次郎　利いた風なことを言うな。
大津　小川班長の御実家はどちらですか？
慎次郎　貴様の知ったことか。
大津　ご両親様はご健在ですか？　暮らし向きはいかがですか？　皆何不自由なくお暮しでしょうか？　この日本は、この戦争は、本当に私たち国民を幸せにしてくれるのでしょうか？
慎次郎、大津を繰り返し殴り、蹲った大津をしたたかに蹴り上げる。
慎次郎　調子に乗りやがって。どなたのおかげで、貴様は暮らすことが出来てるンだ。
大津　…。

慎次郎　我々臣民は、陛下の手足としてお仕えすることがすべてである。手足が四の五の考える必要はない。分かったな。
大津　…。

ボンという破裂音。
軍帽を被った兵士出てくる。

兵士　失礼します。
慎次郎　また失敗か。今日は何発目だ。
兵士　四発目、かと。しかし貼り合わせに問題はなかったはずですが。
慎次郎　では何で破裂した？
兵士　女学生たちはよくやっております。
慎次郎　そんなことは聞いてない。
兵士　少女たちは、ごわの接合に全体重をかけて、完全な密着を試みています。それも、指紋がなくなるほど、必死で圧着に努めております。
慎次郎　…。

慎次郎、大津を見る。

慎次郎　立て。
大津　…（立つ）。
慎次郎　（兵士に）気球製造作業を直ちに中止し、製造工程を全般的に見直す。製造班の女学生に、弥栄会館正面玄関前車寄せに集合するよう伝えよ。
兵士　は。製造作業を中止し、製造班女学生に弥栄会館正面玄関前車寄せ集合を伝えます。（退場）

慎次郎　（大津に）貴様は破裂した気球四発を岡崎に運び、速やかに修復、再度満球テストの上、発送作業まで完了せよ。
大津　…。
慎次郎　復唱！
大津　…は。破裂した気球四発を岡崎で速やかに修復し、再度満球テスト、後発送作業まで完了いたします（退場）。
慎次郎　…。

暗くなる。

5場　紙風船

昭和二十年一月。
風が硝子戸を叩く。
明るくなると、幸子が手紙を黙読している。
咳込む。
すると頬に絆創膏を貼った大津、出てくる。

大津　実家からかい？
幸子　…（慌てて手紙を畳んで仕舞って）どこからでもいいじゃないですか。
大津　相変わらずつれないなあ。
幸子　何したンですか？

大津　え。
幸子　（絆創膏を指して）それ。
大津　別に。
幸子　どうせまた余計なことを言ったンじゃないンですか。
大津　余計なことか。
幸子　違うンですか。
大津　うん。確かに、班長には耳障りなことだったみたいだな。
幸子　もう少し、うまく立ち回れないンですか。
大津　そっちこそ。
幸子　私？
大津　何したンだよ。
幸子　何のこと。
大津　これ、君ンだろ。

大津、女物のハンカチを差し出す。
幸子、ハンカチを受け取って開いてみると、泥まみれで、あちらこちらが破れている。

大津　ローマ字で、S、S。佐々木幸子。
幸子　…。
大津　裏口の三和土に落ちてた。
幸子　そうですか。
大津　何か恨まれることでも。
幸子　別に。
大津　本当に？

幸子、黙って膝の上のごわを手でしごき始める。

大津　怖いねえ。女の園は。

幸子　持たざる者が持つ者を羨む、やっかむ、妬みまくる。これは当たり前です。ただそれだけです。

大津　余裕だなあ。さすがは大会社の御令嬢。

幸子　嫌味ですか。

大津　帰れよ。

幸子　え。

大津　だから、実家。

幸子　いいンです。

大津　心配してるンだろ。手紙。

幸子　余計なお世話です…（また咳込む）。

大津　どうしてそう我を張るかな。

幸子　…私は負けません。

大津　負けない？

幸子　逼迫した戦局の中で、この苦しみと対峙できるかどうか、御国のために身命を尽くせるかどうかは、自分の意思次第です。私は何があっても自分の持ち場を守り抜きます。

大津　頑固だなあ。

幸子　意志が固いンです。

大津　そこがまたかわいいンだけど。

幸子　やめてください。

短い間。

大津、「故郷の空」を口ずさむ。

大津　夕空晴れて秋風吹き
月影落ちて鈴虫鳴く
思へば遠し故郷の空
ああ、我が父母いかにおはす

幸子　…。
大津　あ。
幸子　え。
大津　なんだっけ？
幸子　何がです？
大津　二番。
幸子　二番。
大津　覚えてない？
幸子　…澄行く水に秋萩たれ
玉なす露は、ススキに満つ
大津・幸子　（一緒に）思へば似たり、故郷の野邊
ああわが弟妹（はらから）たれと遊ぶ

また短い間。

大津　あのさ。
幸子　何です。
大津　紙風船って折れる？
幸子　紙風船？
大津　折らなかったかい？　小さいころ。

幸子　（大津にごわを取り上げられて）あ。
大津　どうやったっけ？　折り方。
幸子　返してください。
大津　覚えてない？
幸子　これはそんなもの折るためのものじゃありません（と、大津から取り返す）。

大津、幸子の横顔を見つめて、

大津　負けてもいいンじゃないかな。
幸子　は？（手を止める）
大津　持ち場なんか守れなくたっていいじゃないか。君が負けて、彼女たちが清々するなら、そういうのもありだと思うけどな。
幸子　何言ってるンです、
大津　泣いたっていいじゃない。そんなこと、肩ひじ張るところじゃないよ。だって体壊したら何にもなんないし。ご両親だって心配してるンだし。
幸子　敗北の向こうに幸福はあり得ません。勝利を信じ、逆境を戦い抜くからこそ、人は幸せになれるのです（再びごわをしごき始める）。
大津　それは、人を押しのけてでも？
幸子　押しのける？
大津　例えば、ここに井戸があったとする。
幸子　井戸って？
大津　そう。井戸だ。あの水を汲んだりする。井戸端の。
幸子　なんです？　急に。
大津　まあ聞けよ。その井戸に、今まさに幼い子が落ちかけている。どうする？
幸子　どうするって、助けに行くでしょ。

大津　そうだろ。自分より弱い者を守ろうとする。まあ、尊い博愛の精神だ。
幸子　当たり前です。
大津　じゃあ、落ちかけているのがアメリカの子どもだったら、君は助けに行くかい？
幸子　米国の。
大津　金髪のイギリスの子なら？
幸子　…。
大津　辮髪の支那の子どもだったら？
幸子　どうして。
大津　襟に鍵十字のバッチを付けたドイツの子なら、迷わず助けられるかい。
幸子　どうして、そんなこと言うンです。
大津　…今度、折り方教えてよ。
幸子　え。
大津　紙風船。
幸子　…。
大津　子供の頃、お袋が千代紙で折ってくれてね。
幸子　…。
大津　自分で折り方覚えると、今度は色紙で折って、その次は新聞紙で折って。大きいのができる
　と妹が喜んでね。二人で紙風船飛ばして遊んだンだ。
幸子　…。
大津　（ごわを幸子に返して）邪魔したね。

　大津、故郷の空の口笛を吹きながら、部屋を出ようとする。

大津　（立ち止まって）…その紙風船は誰を幸せにするのかな。

大津退場。
取り残される幸子。
暗くなる。

6場　戸納の事情

明るくなる。
戸納が立っている。
再び毛糸の帽子をかぶる幸子。
令和元年十一月。

戸納　「この地は第二次世界大戦中、アメリカ大陸において、敵の攻撃によって死者を出した唯一の場所である」

今から三十年ほど前、私は、アメリカのオレゴン州で、小さな記念碑の前に立っていた。
隣にいた友人が、ここが、風船爆弾で死者が出た場所だと教えてくれた。
「さゆり、君はこんな詩を知っているか？」
彼は記念碑を見ながら、ある詩を口ずさんだ。

「行け従軍の兵士
吾人（ごじん）今や諸君の行（こう）を止むるに由（よし）なし
諸君今や人を殺さんが為に行く
否（しから）ざれば即ち人に殺されんが為に行く
吾人は知る
是れ実に諸君の願ふところにあらざることを」

アメリカ人で、日本文化を研究していたその友人によれば、これは明治時代の、日本のとある思想家の詩だという。
私は彼の話を聞きながら、もう一度目の前の記念碑を見つめた。
頬を撫でるような優しい風、鳥の囀り、遠くから聞こえる牛の鳴き声。
私は何も知らなかった。
この記念碑も、明治時代の思想家のことも、何も。
戦争とはあまりにも不似合いな、ブライという小さな田舎町だった。

照明転換。

幸子　ゆ～ぞらはれて、あきかぜふき～
　つ～きかげおちて、すずむしなく～（と歌っている）、

戸納、幸子に寄り添って、歌に合わせて肩を叩いてやる。
慎次郎、帰って来る。

慎次郎　ただいまあ。
戸納　お帰りなさい。
慎次郎　ああ。これはこれは。
戸納　すみません。勝手にお邪魔して。
慎次郎　ああ。どうぞどうぞ。（幸子の歌を聞いて）またそれか。
戸納　ご機嫌ですね。
慎次郎　きょうはよう声が出とる。
幸子　おとーさん、おとーさん。
慎次郎　なんやなんや。

幸子　…ぜりー。
慎次郎　あ。
幸子　ぜりー。ぜりーちょーだい…。
慎次郎　さっき食べたやろ。
幸子　ぜりー。ぜりー。
戸納　すみません。さっき、勝手に冷蔵庫開けさせてもらったンですが、ちょっと見当たらなくって。
幸子　ぜりー。おとーさん。おとーさん。
慎次郎　しゃあないなあ…。

慎次郎、台所に入って、買い置きのゼリーとスプーンを持って戻ってくる。

慎次郎　（手にしていたゼリーの蓋を開けて、幸子に差し出す）ほれ。
幸子　…（スプーンを貰って食べ始める）。
戸納　（幸子に）良かったですね。
慎次郎　五個目ですわ。これで。
戸納　は？
慎次郎　今日五個目。
戸納　五個。
慎次郎　何でした？　今日は。
戸納　あの。今日はこれまで伺った内容を確認させていただこうかと思いまして。
慎次郎　相変わらず熱心やなあ。
戸納　（カバンの中からノートを出そうとして）あの、せっかくお聞かせいただいたのに、間違いがあるとアレですし。
慎次郎　（幸子から食べ終わったゼリーを取り上げながら）幸子はこんなんやし、確認言うてもなあ。
戸納　あの。ご主人さんに確認いただくだけでもいいンです。

慎次郎　ああ。ワシか。ああ。ワシでよければ。
戸納　すみません。あれ。幸子さん。

幸子、いつの間にか寝てしまっている。

慎次郎　あーあ。幸子、ほれ。（と片手で幸子の車いすを押そうとする）。
戸納　（慎次郎が片手不自由なのに気が付いて）あ。お手伝いします。
慎次郎　いやいや、大丈夫や。毎日のことやさかい。

慎次郎、車いすを転回しようとする。
と、背後に気配を感じ、急に振り返る。
途端にゼリーのカップを落とす。

慎次郎　あ…。
戸納　拾います拾います。

慎次郎、まだ周囲をじっと窺っている。
戸納、慎次郎の表情を覗き込みながら、

戸納　…あの。大丈夫ですか？
慎次郎　え？　ああ…（右手を摩りながら）力入らへんねん。右。
戸納　お怪我ですか。
慎次郎　昔ね。ちょっと。…何年経っても、慣れへん。

慎次郎、ゼリーのカップを持って退場。

しばらくするとひざ掛けを持ってきて、幸子の肩にかけてやる。

慎次郎　…トノさんいうたかな。
戸納　あ。はい。
慎次郎　アンタ、なんで、そないに熱心なンや。
戸納　え。
慎次郎　いやあ。その、取材。
戸納　ああ。
慎次郎　いくら仕事やいうても、ようここまで。
戸納　すみません。何度も。
慎次郎　いやいや。
戸納　昔、風船爆弾の被害者の記念碑を見たことがあって。
慎次郎　ほお。被害者の。
戸納　学生の頃、アメリカに留学していたンです。友人が、その記念碑に連れてってくれて。（ノートを出して）オレゴン州のブライという町でした。ご存知ですか？
慎次郎　オレゴン…。
戸納　その記念碑には、「この地は第二次世界大戦中、アメリカ大陸において、敵の攻撃によって死者を出した唯一の場所である」と刻まれていました。
慎次郎　…。
戸納　一九四五年、昭和二十年五月五日、ミッチェルという牧師さんとその奥さん、近所の子どもたちが森林公園にピクニックに来ていました。
　ミッチェルが奥さんと子どもたちを降ろして、駐車場に車を止め、ようやく弁当などを運び出そうとしていた時です。
「風船みたいなのが木にぶら下がってるよ。」
　一人の子どもが叫んだそうです。

ミッチェルは反射的に「触るな」と叫んだつもりでした。
だけど、その声をかき消すようにすさまじい轟音があたり一面に響き渡りました。
ミッチェルが森に駆け込むと、そこで見たのは、爆発で地面に空いた大きな穴と、その周辺に転がっている子どもと奥さんの惨死体でした。
慎次郎　…。
戸納　見上げると、木の枝に巨大な風船がぶら下がっていて、その下には不発の焼夷弾が吊り下げられていたそうです。
慎次郎　ほお。
戸納　連れてってくれた友人が、その、亡くなった子どもの甥にあたるンだそうで、こんな歴史があったことを教えてくれました。
慎次郎　そうですか。
戸納　あの…ご主人さんは、あの戦争をどうお感じになってますか。
慎次郎　…いやあ、実に戦争は悲惨なものやなあ。
戸納　ええ。
慎次郎　東京大空襲、沖縄、そして広島と長崎と。失われなくてよかった命がぎょうさんのうなって。あまりにも切ないねえ。平和でないとなあ。なんもでけへん。なあ。せやろ。
戸納　あの…（別のノートを出して）これ見てください。オレゴンで亡くなった子どもたちです。シャーマン・シューメイカー、ジェイ・キフォード。あ。この人が友人のおじさんに当たる人です。エディ・エンガー、ジョン・パッチ、ディック・パッチ。それから牧師さんの奥さんのエルシー・ミッチェル。六人…六人です。
慎次郎　ああ。
戸納　ちなみに、牧師の奥さんのおなかには赤ちゃんがいて。その、赤ちゃんを含めたら七人、ですか。
慎次郎　ほお。赤ちゃん。
戸納　ええ。

慎次郎　それは可愛そうに。
戸納　…悲惨なのは負けた国ばかりじゃありません。戦争に勝った国にも、犠牲者はいます。
慎次郎　正にアンタの言うとおりや。
戸納　恐れ入ります。
慎次郎　時代っていうンかなあ。みんながそこだけを見とるからねえ。勝たなきゃいけないって。ただそれだけを信じて。勝てさえすれば、すべてよかったンやろなあ。
戸納　あの。
慎次郎　ん？
戸納　やっぱり、勝てると思ってたンですか。
慎次郎　ああ。
戸納　和紙と蒟蒻糊で作った風船爆弾で。
慎次郎　アンタ、どう思う？
戸納　え。
慎次郎　トノさん。アンタ。
戸納　どうって。
慎次郎　…（優しそうに笑っている）

突然、三つ揃えのスーツを身にまとった大津が入って来る。

大津　失敬。

7場　慎次郎の事情

昭和二十年二月。
戸納退場。慎次郎、軍帽を被る。
幸子の父は手にはパイプを持っている。

幸子の父　どうですか。作業は順調ですか。
慎次郎　わざわざお立ち寄りいただき、恐縮です。おかげさまで何とか軌道に乗りつつあるところでありま す。
幸子の父　それは何よりです。なにせ「ふ」号作戦には我が国の存亡がかかってますからな。
慎次郎　御社のご協力には、区隊長も深く感謝されておられました。
幸子の父　よろしくお伝えください。
慎次郎　ありがとうございます。
幸子の父　ちなみに…。
慎次郎　は。
幸子の父　娘は、幸子はお役に立っておりますか。
慎次郎　はい。ご自分のお体を顧みることなく、率先して作業に従事されています。「これぞ軍国乙女の鏡」と区隊長はじめ、班の皆が感心している次第です。
幸子の父　甘やかして育てたせいか、わがままばかりで困ります。あれで見たとおり体も弱い。班長から自宅に戻るように、ご命令いただけるとありがたいのですが。
慎次郎　自分もお嬢様にはくれぐれも無理をしないようにと申しあげているのですが、ご自身の信念が固く、ここで作業に従事したいと、
幸子の父　（いきなり慎次郎を殴る）…ただでさえ子育てで手を焼いているンだ。これ以上手を煩わせないでいただきたい。
慎次郎　申し訳ありません。しかし、お嬢様はミッドウェーで亡くなったお兄様の敵を討つのだとおっしゃって、
幸子の父　（再度、慎次郎を殴る）下士官風情が…。佐々木の家のことを軽々に口にするとは。

慎次郎　悪くありました。
幸子の父　いいですか。この戦争、もうしばらく続いてもらわねば困ります。矢継ぎ早の軍の注文に応ずるべく、我が京都佐々木電機はこれまで、内地はもとより大陸にも多大な投資を重ねてきている。
その借金の形があんな紙切れの国債では信用ならん。その投資の回収に目途がつくまでに要する時間は、最低あと一年。であれば、こんな紙風船でも何でも飛ばして、時間稼ぎをしてもらわないと、割に合わない。つまり、ウチの会社は倒産だ。そんな理不尽な話はないでしょう。正直、我ら資本家にとっては、国の勝敗などどっちでもいいのです。ま、この辺が君たち軍人とは思想が異なるのだが。
慎次郎　お言葉ですが、自分はこの戦争に勝って、アジアが日本を中心に、一つの国のようになることこそが、万民が幸せになる道であると信じています。
幸子の父　（京言葉で）阿呆か君は。万民が幸せになるなどということはあり得へん。搾取する者と搾取される者がおるンが経済や。死にに行く一兵卒と命令する大将がおるンが戦争や。人が胡坐をかくためには、下敷きになる人間が必要なんや。
慎次郎　…（怒りに震えるのを我慢している）。
幸子の父　何や。
慎次郎　…何でもありません。
幸子の父　ふん…。

幸子の父、出ていこうとして、

幸子の父　ああ。それから。
慎次郎　は？
幸子の父　妙な噂を聞きました。
慎次郎　どのような。

幸子の父　陛下が、この歌舞練場をご視察になるとかならないとか。
慎次郎　…。
幸子の父　事実ですか。
慎次郎　いえ。単なる噂です。
幸子の父　でしょうね。ご視察などある訳がない。
慎次郎　…何故です。
幸子の父　あ？
慎次郎　何故、ありえないのでしょうか。
幸子の父　…（笑って）畏くも現人神だぞ。その陛下が、こんな下賤な現場をわざわざご視察になる筈がなかろう。
慎次郎　…。
幸子の父　谷中だそうだな。
慎次郎　…。
幸子の父　生まれだよ。君の。
慎次郎　…。
幸子の父　名誉の負傷で出世か。ん？　どんな手を使ったか知らんが、よくここまで這い上がったものだ。
慎次郎　…。
幸子の父　思いあがるな。
慎次郎　…。
幸子の父　とにかく、根も葉もない噂の芽は早々に摘み取るのに限ります。学生諸君が浮足立たぬよう、しっかりご指導ください。
慎次郎　…かしこまりました。
幸子の父　頼みましたよ。班長殿。

幸子の父、退場。
慎次郎、左手で右手を摩っている。
幸子、帽子を脱いで、

幸子　班長…。
慎次郎　ああ。来たか。ちょっと手紙の代筆を頼みたい。
幸子　その前にお聞きしたいことがあります。
慎次郎　…。
幸子　よろしいですか。
慎次郎　何か。
幸子　先生から自宅に戻るように言われました。
慎次郎　そうか。
幸子　父が…。
慎次郎　うん。
幸子　父が、何か言ったンですか。
慎次郎　俺は、何も知らん。
幸子　私、嫌です。戻りません。
慎次郎　わがままを言うな。
幸子　私人並みの作業をこなしています。皆さんにご迷惑はかけていないつもりです。
慎次郎　お父上だって、佐々木の体を心配しておられるのだ。分かるだろ。
幸子　…分かりません。分かりたくありません。
慎次郎　佐々木。
幸子　なんで…なんでですか。なんで私だけ特別扱いされるンですか。私の家が裕福だからですか。
　私が病弱だからですか。私の父が軍に顔が利くからですか。
慎次郎　佐々木。

幸子　おかしいです。挙国一致でこの難関を突破せよと言われてる最中、なんでこんな特別扱いがまかり通るンですか。
慎次郎　佐々木。そこに座れ。
幸子　嫌です。
慎次郎　（怒鳴る）いいから座れ。

幸子、気を飲まれて、座る。

慎次郎　今から言うことを、そこの便箋に書け。
幸子　…便箋に。
慎次郎　これは班長命令である。黙って書け。
幸子　…。
慎次郎　拝啓。お父上様、お母上様におかれましては、お達者でお過ごしでしょうか。
幸子　…（慌てて便箋に書き始める）。
慎次郎　自分は今、重要な作戦の一端を任され、日々任務に精励しております。軍事機密故、詳細を申し上げられませんが、私の双肩に我が国の命運がかかっていると思うと、身震いを感じます。
幸子　…。
慎次郎　書けとるか。
幸子　これは。
慎次郎　俺は右手がコレでな（と怪我をしていることを指し示す）。
幸子　は。
慎次郎　いつも代筆をさせとる部下が、今日は所用で不在や。
幸子　それで私が。
慎次郎　黙って書け。
幸子　…。

慎次郎　先日の千代の縁談、残念でした。千代はさぞ気に病んでいることでしょう。むしろ、あんな家柄ばかり気にするような男に、千代はもったいないくらいです。今に、千代には、きっといい話があります。今はそっとしてやってあげてください。お願いいたします。
　それから谷中（やなか）の田んぼは順調ですか。
幸子　…（一瞬、筆が止まる）。
慎次郎　…父上様と健一兄が汗水流して開墾された田んぼです。小作料を間引いても、きっと今よりは暮らしもよくなるのではないでしょうか。一粒でも多くの稲が実ることを祈らずにはいられません。
　本当は自分が、ご両親様のもとで、親孝行するのが筋ですが、学のない六男坊では無駄飯食いの足手まといになってしまいます。何卒お許しください。
　僅かばかりですが、仕送りを同封します。どうかお役立てください。

敬具

昭和二十年二月吉日

慎次郎拝

ご両親様

幸子　…。
慎次郎　書けたか。
幸子　はい。

間。

慎次郎　お父上だってお前を心配しとるンや。それは分かるな。
幸子　…そう、ですね。

慎次郎　誰でも持って生まれたもンがある。だからうまくいかへん時もある。でも、我慢しなきゃならん時かてあるンやないか。なあ。
幸子　…すみませんでした。
慎次郎　お互い、面倒な時代に生まれたな。

慎次郎、去ろうとする。

幸子　班長。手紙。
慎次郎　おお。

幸子、便箋を四つに折って、慎次郎に渡す。

幸子　あの。
慎次郎　うん？
幸子　その手は名誉の負傷と伺いました。
慎次郎　ただの生き恥や。
幸子　たとえ恥でも、班長が生きていれば、それだけでお喜びだと思います。
慎次郎　喜ぶって、誰が。
幸子　故郷のご両親様やご家族の皆様。
慎次郎　阿呆か。
幸子　…。
慎次郎　佐々木。
幸子　はい。
慎次郎　お前、もうしばらく現場せえ。
幸子　いいンですか。

慎次郎　区隊長には話しとく。
幸子　…（頷いて）ありがとうございます。
慎次郎　やかましい。

その時、空襲警報。

慎次郎　当番！　当番！
兵士　（軍帽を被って登場）班長！
慎次郎　どうした。
兵士　西南西大山崎方面から、敵機Ｂ29東へ侵攻、伏見周辺を空襲とのことです。
慎次郎　我が軍の迎撃は？
兵士　不明です。
慎次郎　被害の範囲は？
兵士　桃山御陵西側一帯に火災を確認。まるで陵の森が燃えているようです。
大津　（学生服に戻って登場）さっちん。さっき、伏見に買い出しに行ってた学友が帰ってきた。彼が言うには、竹田街道は伏見から市内に難を逃れてきた人たちで溢れ返ってるって。逃げてきた人に被害を聞くと、大手筋を挟んで、下板橋から南新地まで、至る所が燃えてるらしい。消火作業などはとても追いつかず、皆が皆、阿鼻叫喚の中逃げ惑うばかり。特に下板橋の軍需工場がひどいらしいンだ。さっちん、下板橋の軍需工場って。
幸子　…。
大津　さっちん！
慎次郎　佐々木！
兵士　佐々木さん！
幸子　…お父さん。お母さん。

暗くなる。

8場　召集令状

昭和二十年三月。
風を送るモーター音が低く聞こえる。
ゆっくり明るくなる
出来上がった気球を試験的に膨らませる満球テストを行っている。
舞台上手面に車いすの幸子。ひとり離れて、膨らんでゆく気球を見ている。
大津が現れる。

大津　さっちん。
幸子　あ。
大津　（周囲を伺って）一人かい？
幸子　私はこの作業には携われないし。
大津　満球テスト。
幸子　出来上がった気球に、八割方の空気を送り込んで膨らませる。うまく膨らめば茨城の放球基地に出荷できるし…。
大津　うん。
幸子　破裂すれば、運搬班の皆さんに岡崎の美術館に運んでもらって修復する。
大津　また小川班長怒るだろうな。
幸子　怒るでしょうね。

二人笑う。
幸子、いつのまにか「故郷の空」を口ずさんでる。
大津も一緒に歌う。
間。

大津　…すこし落ち着いたかい？
幸子　（頷いて）…こういう時代ですから、外地も内地もないンですね。今正にここが戦場なンだと、やっと実感できました。
大津　ここが戦場か。
幸子　その戦場に、陛下がわざわざ視察になんて来られるわけないですよね。
大津　みんながっかりしてたな。
幸子　浮足立っていた自分が恥ずかしいです。軍国乙女失格です。
大津　…明後日、入営することになったよ。
幸子　（振り返って大津の方を見て）…明後日。

大津、ポケットから電報を取り出して、幸子に渡す。
いつの間にかモーター音が聞こえなくなる。

幸子　…ショウシュウレイジョウキタル。スグカエレ。チチ。
大津　水戸の、歩兵第一〇二連隊だ。
幸子　水戸。
大津　明日朝、京都八時九分発東京行き一三二号列車で発つ。
幸子　…そうですか。

間。

幸子　おめでとうございます。
大津　本気で？
幸子　え？
大津　本気で、そう言ってるのか？
幸子　どういう意味でしょうか？
大津　やっぱり、僕には思えないンだ。この戦争が正義の戦争だと。
幸子　え。
大津　米英を破り、東亜に新しい秩序を作るという。それは一体、誰のための秩序なンだ。
幸子　しッ。いけない。
大津　アジアの人のための秩序なのか。日本人のための秩序なのか。僕や君のための秩序なのか。
幸子　そんなこと言ってはいけない。
大津　結局は、アジアを支配していた米英に、日本がとってかわるだけはないのか。アジアの人は誰ひとり幸せになんかなれないンじゃないのか。
幸子　やめてください。そんなこと言ってはいけないンです。
大津　いや。言わせてくれ。こんなちっぽけな命でも、父と母が爪の先に灯を燈すようにして暮らし、丈夫な身体と学を与えてくれた。兄や妹がこの京都まで送り出してくれた。その苦労を思うと、一部の特権階級のために、この命を投げ出す気持ちになんてなれないンだ。
幸子　言わないで。
大津　…。
幸子　言わないで。
大津　さっちん。

間。

幸子　私なら…。
大津　うん。
幸子　私なら、喜んで死ねるけど。
大津　え。
幸子　昭和一七年六月のミッドウェー海戦で、年の離れた兄は靖国の人となりました。妹の私にも威張ることのない、心優しい兄でした。小さい頃から詩が好きで、いつも詩集を持ち歩いて、暇さえあれば自分でも詩を作って。てっきり大学に進むと思っていたら、海軍に志願すると言い出しました。入営の前夜、兄は「幸子そこにお座り」というと、一冊の詩集を出してきて、私に聞かせてくれました。印度のタゴールという人の詩集でした。読み終わると兄は私にこう語りかけました。
大津　「幸子。いいかい。僕たちはね、東洋の確立と民族共栄のために、もっともっと頑張らなきゃならないンだよ。」
幸子　そして翌朝、陽が昇り切る前に家を出ていきました。兄は米英から東亜を開放し、民族共栄の礎となるために、陛下のために死んでいきました。そして先日は銃後を守ってきた父や母も…。
大津　…。
幸子　私は、兄や父母を失いましたが、心から誇りに思っております。そして私自身も、陛下の赤子として、いつでも死ぬ覚悟はできています。
大津　さっちん。
幸子　佐々木幸子、いくら軍国乙女の鏡と言われても、口惜しいのは男（おのこ）としてこの時代に生を受けなかったこと。弟であれば、息子であれば、今すぐにでもこのごわを捨て、銃をとり、操縦桿を握り、または艦艇の舵を取って、敵兵の中に突撃したことでしょう。
大津　さっちん。
幸子　何を憶しているのです。すぐさまペンを置いて、立ち上がりなさい。あなたが今すべきなのは参考書に赤線を引くことではなく、敵兵に銃口を突きつけることです。
大津　さっちん。
幸子　今すべきなのは、黒板に数式を並べることではなく、戦地に敵兵の梟首を並べることです。

大津　さっちん。
幸子　今すべきなのは、球場で白球を追うことではなく、敗走する敵兵の背中を追うことです。
大津　さっちん。
幸子　さあ、行きなさい。今こそ新しい秩序の前に、古い文化を跪かせ、真の東洋の確立と民族共栄を成し遂げるのです。
大津　さっちん。
幸子　すでに戦地に向かわれた御学友の皆様も、靖国の桜の下でお待ちのことでしょう。どうか御武運を、心からお祈り申しております。
大津　…幸子さん。

間。

大津　（笑って）…かなわないな。
幸子　…ごめんなさい。
大津　いや。
幸子　ごめんなさい。
大津　…（膨らんだ気球を見ながら）茨城の、五浦の海岸からしいよ。
幸子　…。
大津　こいつを飛ばしているの。出荷作業している内に仲良くなった兵隊に聞いたンだ。あ、ほら一度一緒に茨城に遊びに行こうって誘ったじゃないか。岡倉天心の「亜細亜は一なり」の石碑のある。
幸子　…ああ。

大津、また「故郷の空」を口ずさむ。
幸子、黙って聞いている。

大津　…何にもなくって、ただのんびりとした、きれいなところなンだけどね。あんな景勝地から、こんな物騒なものが飛ばされてるなんて信じられないけど。
幸子　そうなンですか。
大津　ああ。どうせなら、こいつに乗ってアメリカに行けたらいいのに。
幸子　…。

慎次郎、出てくる。

慎次郎　何をしている。
大津　…。
慎次郎　貴様、今、歌を歌ってなかったか。
大津　（敬礼をして、電報を見せる）世話になった礼を言ってたところです。
慎次郎　（電報を一読して）…おめでとう。
大津　ありがとうございます。
慎次郎　水戸にはいつ？
大津　明日の朝八時九分発の一三二号列車で、京都駅を発ちます。
慎次郎　見送りたいが、ここも戦場である。許せ。
大津　お気遣い、ありがとうございます。（敬礼）。
慎次郎　武運長久を祈る（敬礼）。
大津　失礼します。

暗くなる。

9場　懺悔

明るくなる。
令和元年十一月。
幸子、車いすの上で寝ている。

戸納　それで、戦後は、歌舞練場はどうなったンですか？
慎次郎　進駐軍に接収されてな。
戸納　進駐軍に。
慎次郎　うん。確かダンスホールやったか、なんかそんなのに使っとったンやなかったかな。
戸納　はあ。
慎次郎　まあ。あンだけ広いさかい。ダンスでもなんでもできるわな。
戸納　なるほど。その後、また今の歌舞練場に戻ったと。
慎次郎　そうなンやろね。
戸納　あの、風船爆弾はいつまで製造されたンですか？
慎次郎　えーっと。あれは四月くらいまでやったやろか。
戸納　四月って、昭和二十年四月。
慎次郎　あれは冬の偏西風が吹いてる内しか飛ばせへんしね。
戸納　軍も、あんなに期待してたのに。
慎次郎　諦めたんちゃいますか。思ったほど成果が出えへんさかい。
戸納　じゃあ、女学生の皆さんは？
慎次郎　他の軍需工場に配置換えになっていきましたわ。
戸納　幸子さんも。
慎次郎　幸子は歌舞練場に残して、しばらく後片付けをさせました。
戸納　ご主人さんが？
慎次郎　（頷いて）幸子の実家は空襲で焼けてしもうたでしょ。

戸納　ええ。
慎次郎　帰るところものうなったしね。会社が羽振りを利かせてた頃に寄ってきとった連中も、残ったのが負債だけやと知ると、知らん顔や。まったく現金なもンやで。
戸納　ご親戚とか、他に身寄りなんかはいらっしゃらなかったンですか。
慎次郎　おったンでしょうな。たぶん。幸子が歌舞練場にいることも知っとったはずやわ。けど、誰ひとり迎えに来いひん。こっちは軍のツテを頼って連絡を取ってやる、とも言うたンですが、幸子が「結構です」とこう言い張る。こいつもこれで結構頑固やさかい、意固地になって益々作業に没頭しよって。
戸納　幸子さん、さぞお辛かったでしょうね。
慎次郎　あの頃は、皆何かとね。
戸納　で、ご主人さんが幸子さんと一緒になられて。
慎次郎　ま、立場上、面倒見とったさかい。まあその、なりゆきやなあ。
戸納　ご縁ですね。
慎次郎　（笑って）そんなええもんちゃうって。

慎次郎、急に険しい表情になって、周囲を窺う。

慎次郎　…。
戸納　え。
慎次郎　しっ。
戸納　…。
慎次郎　アンタ。
戸納　はい。
慎次郎　聞こえなかったか。
戸納　…何がです。

慎次郎　声がしたろ。
戸納　声？
慎次郎　呼んどった。
戸納　呼ぶ？　誰を？
慎次郎　…ワシを。
戸納　…いえ。別に。
慎次郎　ホンマに？
戸納　ええ。

短い間。

戸納　あの。
慎次郎　え。
戸納　大丈夫ですか？
慎次郎　ああ。大丈夫や。
戸納　ひとついいでしょうか？
慎次郎　…ああ。うん。
戸納　ずっと気になってたことがあって。
慎次郎　なんやろ。
戸納　なんで日本軍は、あんなに風船爆弾に執着したのかって。
慎次郎　え。…ああ。
戸納　ご主人さんはどう思われますか？
慎次郎　どうやろなあ。ワシら兵隊は、とにかく勝つことしか考えへんかったしな。
戸納　調べたンです。私。この間、いろいろ文献当たったりして。
慎次郎　…。

戸納　風船爆弾って、風任せで、実際どのくらい戦果が上がってるかも分からないじゃないですか。でも、秘密の最終兵器だったンですよね。威力だって、十五キロ焼夷弾一発と四キロ焼夷弾二発をぶら下げているだけです。命中率も殺傷力も高くないのに、どうして女学生を動員してまで、軍は風船爆弾を飛ばすことに拘ったンでしょう。アメリカは、同じ頃、原子爆弾の開発を進めていたンですよ。

慎次郎　…なんでやろな。

戸納　（慎次郎を見つめて、ゆっくりと）日本には、もう風船爆弾のほかに頼るものがなかったンです。

慎次郎　…。

戸納　昭和一九年一〇月二四日、フィリピンレイテ沖シブヤン海戦にて戦艦武蔵が撃沈。空母瑞鶴、瑞鳳をはじめとして多くの船が沈んでしまい、連合艦隊は事実上瓦解してしまいます。そこで、この戦いから神風特別攻撃隊が作戦を開始しました。もう若者が体当たりをしなければならないほど、日本は追い詰められていたンですね。

慎次郎　…。

戸納　でも日清戦争、日露戦争と負けたことのない日本は、この太平洋戦争で負けるかもしれないなんて現実を受け入れることができなかった。考えることすらしなかった。

慎次郎　…。

戸納　だから、軍は、偏西風を武器に、紙と蒟蒻でアメリカに立ち向かうしかなかったンです。それで勝てると信じていたのが、当時の女学生たちだったンじゃないでしょうか。

慎次郎　…。

戸納　あの。

慎次郎　…焼ける臭いがしたンだわ。

戸納　臭い？

慎次郎　何っていうンかなあ…脂の…もう、ほれ、焼けるっていう。

戸納　はあ。

慎次郎　焼けたでしょ。幸子の実家。
戸納　ああ。
慎次郎　ワシ、一緒に付いて行ってやったンです。次の日。その。空襲の。
戸納　はあ…。
慎次郎　手え挙げたまま、黒焦げで死んどる死体があった。赤ん坊抱いたまンま死んどった母親の死体もあった。馬も死んどった。血だらけで死んどった憲兵もおった。そんな中、幸子は両親の亡骸探して。
戸納　そうですか。
慎次郎　こう支えてやろうとすると、いらん言うて一人で瓦礫漁って。涙一つこぼさんと。
戸納　…。
慎次郎　愛国心ですわ。燃えるような愛国心。
戸納　愛国心。
慎次郎　勝たなならん。負けたら、アメリカ軍になにされるや分からへん。
戸納　…。
慎次郎　信じてたンやなあ。辛抱すれば、我慢すれば、いつかはって。

間。

戸納　…あの。すみません。なんか、生意気なことを言って。
慎次郎　（笑ってる）ああ。いやいや。

犬の鳴き声。

戸納　あ。（腕時計見て）また長居しちゃって。私。
慎次郎　なあ、アンタ。

戸納　はい？
慎次郎　今の、記事にするンか。
戸納　今のって。
慎次郎　いやあ。ほれ。今の。なあ。
戸納　…いえ。別に。
慎次郎　ふーん。

犬の鳴き声。

慎次郎　さくら。ほれ。
戸納　あ。すみません。じゃあ。

戸納、帰る間際に振り返って、

戸納　あの。ちなみに。
慎次郎　ええ。
戸納　その立命の学生さんはそれっきりですか？
慎次郎　あ？
戸納　大津さんって名前でしたか。
慎次郎　ああ。まあ。あの頃は出征したら、半ば今生の別れやったからな。
戸納　無念でしたでしょうね。
慎次郎　まあ。仕方ないでしょうな。そういう時代でしたさかい。
戸納　茨城の海、幸子さんに見せたいって。
慎次郎　ああ。
戸納　モテたンですね、幸子さん。

慎次郎　どうだか。
幸子　…（口から涎を垂らして寝ている）。

犬の鳴き声。

戸納　ではこれで。遅くまですみませんでした。
慎次郎　いやいや。
戸納　記事になったらお送りさせていただきますね。
慎次郎　楽しみにしとるわ。
戸納　ありがとうございます。御邪魔しました。おやすみなさい。
慎次郎　おやすみなさい。

戸納、退場。
犬の鳴き声。
慎次郎、幸子の車いすを押して退場。
誰もいなくなった舞台。
うす暗くなる。
柱時計が二時を打つ。
上手で冷蔵庫を開ける音。明かりが漏れる。
犬の遠吠え。

慎次郎の声　…ん？

しばらくして、慎次郎登場。

慎次郎　誰や？

辺りを見回す。
誰もいない。

慎次郎　誰や。

柱時計の時を刻む音が響く。

慎次郎　なんや。誰かに呼ばれたかと思ったけどな。
男の声　…班長。
慎次郎　はあ。
男の声　小川班長。
慎次郎　どこや。
男の声　自分であります。歌舞練場でお世話になった、立命館の大津であります。
慎次郎　大津？　大津って誰や？

その時、音楽「観兵式行進曲」。
同時に、部屋中央のこたつ布団がめくれあがり、中から学生服に軍帽の大津が出てくる。
大津は「武運長久」と書かれた襷をしている。

慎次郎　うわあああ。
大津　小川班長。この度はお世話になりました。
慎次郎　ナンや。ナンのことや。

大津　「ふ」号作戦では何のお役にも立てませんでしたが、歌舞練場で過ごした日々は、自分にとってかけがえのない思い出となりました。
慎次郎　そうか。いや。そうですか。そ、そりゃよかったよかった、何よりや。うん。うん。
大津　ちなみに班長。ご実家の田圃は、その後いかがですか？
慎次郎　実家？　なんや？　なんのことや。
大津　ほら。苦労して開墾された、あの谷中の田圃のことです。
慎次郎　はあ？　谷中？　田圃？　あ、あんなの、当の昔に健一兄が借金の形に売り払うたわ。
大津　借金の形に？　あんなにご苦労なさったのに。
慎次郎　ナンボ苦労したって、この世の中、報われんもんは報われんのや。
大津　それは残念です。千代さんは、妹の千代さんにはいいお相手が見つかりましたか？
慎次郎　千代？　千代に相手なんかおるかい。ひとりのまま、一昨々年にのうなったわ。
大津　そうでしたか。ご愁傷様です。
慎次郎　やかましい。どういつもこいつも人をコケにしくさって。
大津　立ち入ったこと失礼いたしました。
慎次郎　ホンマや。お、俺のことなどどうでもええ。お前や。お前の方こそしっかりやれ。
大津　ありがとうございます。しかし、一つだけ思い残したことがあって。
慎次郎　はあ？　思い残したこと。いや、ない。ないやろ。そんなもんはない。
大津　班長、聞いてください。
慎次郎　思い残しはない。思い過ごしや。な。
大津　小川班長。
慎次郎　おう。分かった。何や。聞いとるがな。
大津　佐々木さんに、佐々木幸子さんに伝えたかったことが一つありまして。
慎次郎　さ、幸子？　幸子はもう寝とるがな。
大津　ふざけないでください。
慎次郎　ふ、ふざけてへん。

大津　今、どちらにおられますか。作業場ですか？　それとも宿舎ですか？
慎次郎　作業場にもおらん。宿舎にもおらん。
大津　じゃあ、佐々木さんはどちらに。
慎次郎　どこかてええやろ。
大津　どうしても、どうしても伝えたいことがあるンです。佐々木さんは今どちらに。
慎次郎　あ。いや。その。
大津　班長。
慎次郎　帰った。
大津　帰ったってどこに？　ご実家はこの間の空襲でやられたじゃないですか。
慎次郎　実家やない。
大津　実家じゃなければどちらに。
慎次郎　し、親戚や。
大津　ご親戚ですか。
慎次郎　そうや。
大津　どちらの。
慎次郎　どこかてええやんか。

　その時、汽車の発車を告げるベルの音。

大津　よくありません。このままじゃ、僕は戦地に旅立つことができません。
慎次郎　ナンや。何伝えたいンや。代わりにオ、俺が伝えたるがな。
大津　いや、それはちょっと。班長、佐々木さんはどちらに行かれたンですか？　どうしてお教えいただけないのですか？
慎次郎　いや、俺もよう知らんさかい。
大津　ご親戚っておっしゃったじゃないですか。

慎次郎　そ、そうかぁ？
大津　班長。

汽笛が鳴る。

大津　あ。汽車が。仕方ない。班長、これを佐々木さんにお渡しいただけますか（と懐から茶封筒を取り出す）。
慎次郎　ナ、ナンやこれ。
大津　渡していただければわかります。
慎次郎　わ、渡せばええんか。
大津　はい。よろしくお願いします。
慎次郎　あ。ああ。分かった。分かった。必ず渡したるさかい。し、心配すんな。
大津　（敬礼して）大津俊介、行って参ります。
慎次郎　お、お、大津俊介君の、武運長久を祈って、ば、ばんざーい。ばんざーい。ばんざーい。

汽車が動き出す。
大津、コタツの下に滑り込みながら、

大津　必ず、必ず渡してくださいね。
慎次郎　あ。ああ。はいはい。
大津　小川班長、必ずですよ。
慎次郎　渡す。渡したるさかい。行け。早よ行け。
大津　必ず…

大津、コタツの中に消えていく。

遠のいていく汽車の音。そして汽笛。
いつの間にか居間に、また柱時計の音が聞こえる。
時計は二時を打つ。
呆然と佇む慎次郎。目はうつろ。口からは涎。

慎次郎　…。

上手袖から明かりが漏れる。

幸子の声　お父さん。お父さん。もう、またかいなあ。どこ行ったン？　お父さん。お父さんって。

犬の鳴き声。
ゆっくりと闇に包まれていく慎次郎。

１０場　五浦にて

令和元年一二月。
明るくなると、戸納が出てくる。
戸納は封書を出して、

戸納　「拝啓　北風が肌を刺す季節となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。先日は掲載記事をお送りいただき、ありがとうございました。お陰様で、私たち女学生の、あの歌舞練場で風船爆弾を作っていた歴史が、こうして日の目を見ることができました。

取材していただいていた主人は、年のせいか、最近めっきり弱ってしまい、私が誰だかも分からないことが多いみたいです。あれだけ食べたがった蒟蒻ゼリーも、近頃ではめっきり口にしなくなり、食も大分細くなってきました。」

車いすを押す幸子が出てきて、上手面に立つ。車いすには朦朧とした慎次郎。

戸納　「最初、戸納さんから取材のお申し出があった時、主人は断ろうと言いました。けれど、ここでお話ししなければ、私たち女学生の、風船爆弾を作っていた歴史が人知れず埋もれてしまう。そう思い直し、私は取材を受けようと主人に言いました。その時主人はただ黙って、笑っていました。戦後七十四年が経った今も、主人の中では戦争が終わってないのかもしれません。」

幸子　（戸納の言葉を引き継いで）…先日、どこで見つけたのか、主人が古い封筒を握りしめていました。後でそれを読むと、学徒動員で一緒に作業に当たった立命館の学生さんが書いたものでした。手紙にはこうありました。

大津　（出てきて）…さっちん。僕はやはり天皇のためには死ねないよ。国のためにも、故郷のためにも、君のためにも死ねない。

僕は生きたい。生きて再び、この京都に帰ってきたい。だから死ねないンだ。

僕は、必ず生きて帰ってくる。帰ってきて、また立命で勉強をする。誰もが幸せになれる、そんな社会を作る。

そしてさっちん。君に会いに行く。君に茨城の、五浦の海岸を見せてあげたい。だからさっちん、待っていて欲しいンだ。必ず、必ず会いに行くから…。必ず（退場）。

幸子　…急いで書いたのでしょう。文字は乱れ、所々滲んでいました。

当時、私は、出征する彼にひどいことを言ったのです。「死んで来い。」「人を殺してこい。」「私ならそうする。」「だからお前も生きて帰って来るな。」と言ったのです。

彼は真直ぐな人でした。素直で、穏やかで、明るくて、争いなどとは無縁の人でした。彼は彼なりに学問を積み、時局を見極め、「この戦争は間違っている。」と言ったのです。

しかし私は彼に「何故そう思うのか。」と問いかけることもなく、彼を否定し、彼の人生を深く、深く傷つけてしまいました。
今、私は主人と、彼の故郷、茨城の五浦の海岸に来ています。そうです。あの風船爆弾が飛ばされた海岸です。あんなに海を見たがっていた主人と、こうしてここまで来れたのは幸いでした。私も、主人ももう残り少ない人生ですが、私はあの時の自分の罪をずっと背負いながら生きていくつもりです。
ますますお忙しくお過ごしのことと存じますが、くれぐれもお体ご自愛のほどを。

敬具

令和元年十二月八日

小川幸子拝

戸納さゆり様

戸納　…。

戸納、ゆっくりと退場。
切り立つ断崖に打ち付ける波の音。
吹きつける西風。
車いすの上で、うつろに目を細める慎次郎。
二人を朝陽がオレンジ色に染める。

幸子　お父さん、ほら日の出。
慎次郎　…。
幸子　この群青色の空を、七十四年前、私たちの作った気球がアメリカ目指して飛んで行ったンやね。
次々と、次々と、列をなして。

幸子、口をついたように歌いだす。

幸子　…夕空晴れて秋風吹き
　月影落ちて鈴虫鳴く

やがて慎次郎も幸子に合わせて歌い始める。

　思へば遠し故郷の空
　ああ、我が父母いかにおはす

慎次郎、ゆっくりと立ち上がる。
幸子、驚いて、慎次郎の横顔を見つめる。

幸子　…おとうさん。
慎次郎　…お…おお…（幸子の手を取り、頬に寄せる）。
幸子　（慎次郎の背中をやさしく抱いて）…ありがとう。

打ち付ける波、叩きつける西風。
その中をゆっくり暗くなる。

幕

二〇一九年五月　三日　〇時一四分　自宅にて　第１稿脱稿
二〇一九年九月二九日一六時三〇分　自宅にて　第６稿脱稿

「故郷の空」（明治唱歌）【作詞】大和田建樹【作曲】スコットランド民謡

1

夕空晴れて秋風吹き
月影落ちて鈴虫鳴く
思へば遠し故郷の空
ああ、我が父母いかにおはす

2

澄行く水に秋萩たれ
玉なす露は、ススキに満つ
思へば似たり、故郷の野邊
ああわが弟妹（はらから）たれと遊ぶ

【参考図書】

浅田次郎「終わらざる夏」集英社文庫
岡部伊都子「生きるこだま」岩波現代文庫
岡部伊都子「賀茂川のほとりで」毎日新聞社
ＮＨＫテキスト「100分de名著 岡倉天心『茶の本』２０１５年１月」
小澤眞人＋ＮＨＫ取材班「赤紙 男たちはこうして戦場へ送られた」創元社
「学徒兵の青春 学徒出陣５０年目の答案」角川書店
幸徳秋水「二十世紀の怪物 帝国主義」光文社
櫻井誠子「風船爆弾秘話」光人社
鈴木俊平「風船爆弾」新潮文庫
戦争遺跡と平和を学ぶ京都の会／編「語りつぐ京都の戦争と平和」つむぎ出版
高橋伸一監修 小林啓治・鈴木哲也著「かくされた空襲と原爆」機関紙共同出版
林えいだい編集「写真記録風船爆弾 乙女たちの青春」あらき書店
パンフレット「ひめゆり平和祈念資料館」
「ふ号作戦と勿来―風船爆弾の記憶―」いわき市勿来関文学歴史館
水谷孝信「滋賀県学徒勤労動員の記録 あの日銃後も戦場でした」ウインかもがわ
山中恒「子どもたちの太平洋戦争」岩波新書
立命館大学国際平和ミュージアム特別展「昭和２０年の中学生」
歴史文化ライブラリー「学徒出陣 戦争と青春」

【取材協力】（敬称略）
佐伯靖子
平井澄子
茨城県立歴史館
いわき市勿来関文学歴史館
祇園甲部歌舞練場
ひめゆり平和祈念資料館
明治大学平和教育登戸研究所資料館
水戸市立博物館
立命館大学国際平和ミュージアム

（各五十音順）